

〈特集 新型コロナウイルス感染拡大と演劇上演〉

インタビュー

山上 優 （俳優・演出家・翻訳家）

「例え 10 人でもいいから生の演劇をやろう」



2020 年 7 月 14～20 日 アトリエファンファーレ東池袋

演劇カンパニーOva9（オヴァキュー）第 2 回公演 サラ・ベルティオーム作『Nyotaimori～ニョタイモリ～』翻訳・演出

2020 年 10 月 17～25 日 シアターX（東京・両国）

NLT プロデュース ローラン・パフィ作『ボノボたち～LES BONOBO～』翻訳・演出

北原まり子（日仏演劇協会） 今日はお忙しい中、インタビューに応じていただきありがとうございます。

『Nyotaimori』の公演は、新宿シアターモリエールでの集団感染〔6 月 30 日～7 月 5 日の公演での感染を 10 日に東京都が発表〕が注目されていた時でしたが、どのような状況だったのでしょうか。私は初日に拝見したのですが、観客の中にも「やっと劇場に来られた」という感動のようなものが漂っていて、また、山上さんが挨拶をなさったときに、少し声を詰まらせていらしたのが印象に残っています。

山上 2019 年 12 月に上演することを決めてから準備をしてきて、1 月に公開オーディションをしまして、3 月にチラシができて、その辺りからコロナになりだして、5 月は Zoom で稽古をしていました。前売り開始が 5 月 5 日だったんですけど、5 月はとりあえずディスタンスということでリモートで稽古をしまして、テキストレジュをスタートしました。「本当に公演できるのかな」というのはその時はまだ闇の中で、対面稽古をするかどうかを決めたのが 5 月末で、6 月から対面稽古をしました。メンバーは 6 人で（1 人はアイルランドにいて 7 人）、お二人客演で 8 人、あと演出いれると 10 人くらいのメンバーで稽古を始めたんですけど、150 平米の稽古場をお借りすることができました。上演した小屋の三倍近い広さです。それでもかなり離れて座って、会議用の長机が一人一台という感じで、5 メートルくらいずつ離れて最初は読み合わせをしていました。公演初日は、「お客様に挨拶をして」とメンバーから要望があり、私もしたかったし、とにかく上演ができてここにいられること、お客様が入ってここにいられることが奇蹟のような、今思い出してもちょっと目頭が熱くなるくらい、喜びですね。それまではあたりまえのような事だったんですけど、一人一人の方が来てくださって、ここに居合わせることの大切さ、貴重な時間というか、それが演劇であることの証なので、そういう時間が持ったということに、深い感謝とあの時言った通り、本当に「来て下さってありがとうございます」という気持ちでした。色々な条件があって、「やめようか」とも話し合ったんですけど、劇場はキャンセルしても 100%のキャンセル料を払わなくてはならなかったんで、やめてもお金払うなら、できる限りの努力をして、例え 10 人でもいいから生の演劇をやろう、という志でした。だから思わず胸がいっぱいになりました。

北原 観客の人たちも、「来たぞ」という覚悟のようなものが感じられて、普段とは違う雰囲気が流れていま

した。

山上 その通りだと思います。お一人お一人が責任を持って覚悟されて来ているという感じがあって。実際に、劇場の入り口までいらして、「ごめんね、帰るから」と言った方もいました。来たんだよってことは言いたくて、ただ、ご自分の年齢のことを考えてとか、あまり万全の体調じゃないから、ここで失礼するねと言って帰った方もいました。チケット代だけを置いていかれる方も。地下を降りてくる間の、そして靴の裏まで消毒していただいて、そこを通過してくださった方の特権というか、そういう空気があったのかな。

北原 一回ごとに入れる人数が制限されたと思うのですが、日程の変化はあったのでしょうか。

山上 6月20日くらいにミーティングをしまして、当初は10ステージだったんですが、追加公演を2つ入れて、12ステージにしました。キャパシティの3分の1で、33席マックスということで、少しでも多くの方にみていただきたいかったので2回追加しました。

北原 『Nyotaimori』はちょっとクリアな演出と、予想できない展開で面白く拝見しました。作品自体はコロナの前に決っていたということで、伝染病を扱った演劇ではありませんでしたが、劇中にフェイスシールドを用いた演出がありました。コロナの前に想定していた演出からの変化などはあったのでしょうか。

山上 意識したところはありません。例えば、ずっと走り続けてきて休みなく働いているフリーのジャーナリストが、休みたいという思いで突然にもかも放棄するというのが、ちょうどこのコロナの、まさに私たちに降りかかった状況とまるで写し絵のようだったという点があります。あと、場所と時間がすごく飛ぶホーンで、一つの部屋の中で行われるストーリーではないので、逆にディスタンスがとりやすかったという面は一つありました。例えば、こっちの島とこっちの島に別々に人がいて、近くに寄らないとか。ただ、フェイスシールドをつけた場面は、女性のカップルが言い合いをするという、同一のスペースの中で行われるものだったので、ここは密になるだろう、しかも飛沫とぶだろうな、というので、もう正々堂々つけちゃおうと演出的に思いました。もう一つは、後半でヒデアキ・コマツという男が登場するんですが、それをどこから出すかというのを結構考えていて、いっそのこと客席から、しかもフェイスシールドにマスクをつけて二重にして出そうと考えました。

北原 フェイスシールドは、同じものを一番前の観客にも配布されていました。

山上 舞台面から3メートル近くはとっていたんですけど、さらにお客様が気にされるとあれだと思ったので、最前列のお客様はつけたい方はつけられるようにしました。

西樹里（日仏演劇協会） 『Nyotaimori』（7月）から『ボノボたち』（10月）に移ったときに、感染対策の変化などはあったのでしょうか。Facebookをみると、『Nyotaimori』の方は非常に細かく感染対策について書いていらっしゃるのですが、『ボノボたち』の方は、それほど前面には出ていないように感じたのですが。

山上 Ova9の方は私達の自主制作ユニットなので、規模も小さいですし、自分たちで制作やっているわけですけど、その分逆に、自分たちに責任があるっていう意識が非常に高かったのです。小劇場でクラスターがでた所と最後の3日間くらいはかぶっていたので、もし一週間ずれていたら中止にせざるを得なかった。何かが起きたら責任問題になるし、私達だけでは済まないっていう。『Nyotaimori』が終わってから二週間というのは私達も本当に自粛、無事に二週間が明ける様に祈っていました。ガイドラインもお一人お一人にメールでお渡しして、「こういう風に私達はやります、それでも来てくださる方は来てください」ということで。毎回すごい消毒で、本当に疲れ果てました。みんな手がブヨブヨになるくらい、一回終わったら椅子も床も全部消毒して、ということが7月はかなり神経質でした。8月くらいから少しずつ色んな所が再開し始

めて、NLT さんの方の制作チームもガイドラインを出していました。稽古場では飲み食い、ケータリング等一切やらないとか、出演者、関係者で会食はしない、食堂に行ったりしない、とか。それはストリクトに守っていました。『ボノボ』のほうも、客席は2分の1で市松模様にしか観客は入れなかったのです。『ボノボ』は、稽古に入って一週間位したところで全員 PCR 検査をして、全員陰性を確かめてスタートしたので一つの安心感がありました。気をつけているという意識はほぼ同じでしたけど、なにしろ7月の方は何かあったら責任問題になるから、相当バッシングを受けるかもしれないね、ということは覚悟していました。

西 そうすると、『ボノボたち』の方が少しリラックスした感じだったのでしょうか。

山上 盛り立てていかなきゃ演劇、という気持ちも強くなってきていたし、お客様も少しずつ戻ってきた感じがありました。『ボノボ』も200席ほどのキャパシティの劇場で、85席くらいでやったんですけど、「どういう配席ですか」とか「隣はいるんですか」とか、問い合わせられて来られる方もずいぶんいましたね。だから制作側も、やり方は未定でしたが「配信はやります」とチラシに謳っていて、「生配信は難しいのでは」と思っていたら、結局録画したものを配信することになったようですが。そういったやり方も、7月の時はとてもじゃないけど間に合わないし、考えられなかったですね。

西 配信を拝見したのですが、障害者を中心にして普通のブルヴァール劇に仕立てているというのが、日本ではとても珍しいなと思いました。今回の配信は、プロの方のカメラワークですね。最前列の観客も映っていました。

山上 そうですね、3カメくらい入れて、業者の方が来ていました。客席と舞台はかなり距離を空けて、3メートル以上あけて、最前列に座ってもかなり遠いという感じでした。むしろ配信の方が、近く見られたと思います。

西 お客さんの笑い声とかも入っていて、自粛期間にいろいろ配信もみたんですけど、そういうのはあまりなかったのも、お客さんの反応があると「あ、私今演劇みてる」という感覚に半年ぶりになれました。

山上 確かに4~5月は無観客配信というのはだいぶやられていましたよね。あれは初日の録画だったんですけど。例え配信でも、観客の有無の差は大きいと思います。



(左) 第二場：モード（磯部莉菜子）と彼女（ひがし由貴）が言い争う場面でフェイスシールドを装着

(右) ソーシャル・ディスタンスをとった集合写真

北原 一年間に二つの公演をなさいましたが、劇場によってコロナに対する姿勢や対応の違いもあったのでしょうか。

山上 『Nyotaimori』をやった劇場は、キャンセル料は100%になるけれど、消毒液などは用意します、とか。換気システムは非常に大きいものがついている、と言われて、転換の時に「ガガガガ」って音を出したんですけど、台本上で激しい機械の音をする、というのが書いてあったんですね。その時私は楽屋にいて、すごく大きい排煙装置をその「ガガガガ」の音に合わせてギュンッて入れて排気して、音が止まったら排煙装置を止めるというのをやっていました。シアターXに関しては、知り合いで10月公演、『ボノボ』の直前の公演をやめた団体もいたし、8月公演をやめた団体もありました。それは出演者がやっぱり30人もいるとか。『ボノボ』は舞台上にいるのは6人で、2人のシーンが多かったので。密になる公演は難しかったかもしれないけれど、シアターXのプロデューサーの上田美佐子さんは、灯を消さないで頑張ろうという方であるかと思います。なので、劇場の姿勢というのはあると思います。

山上 いい芝居って、人に何かを考えさせる、それが喜劇であろうと悲劇であろうと。今自分の目の前にあることと重ね合わせたり、比べたり、「あ、これもこういうことなんじゃないかな」と思ったりするんだと思うんですよ。それがアートの役割だったりもするのかな。感染症、ジャストそのことを扱わなくても、そこにつながることはたくさんあるでしょうしね。コロナになって、「何が大切か改めて発見しました」という人もたくさんいますよね、自分も含めてですけど。全員が立ち止まったことは事実だから、そこでやっぱり見えてくるものはあるんだろうなという気がします。

(2020年11月6日 Zoom にて)

【山上優（やまがみ・ゆう）】

舞台実演家（演出・俳優・翻訳）上智大学フランス文学科卒業
劇団青年座研究所を経て、劇団 ED メタリックシアターに解散
まで所属。2001年よりフランス人演出家、教育者フィリップ・
ゴリーエに師事、2003年文化庁新進芸術家海外留学制度により
渡仏、エコール・フィリップ・ゴリーエに留学。その後同校にて
アシスタント、ムーヴメント講師をつとめる。日本人を戯画化し
たソロ・クラウン作品をパリで上演、同じ門下のイギリス人、ス
페인人俳優らと結成したグループで演出を担当。2019年異
なる出自の女優たちで組んだユニット「Ova9」を東京で旗揚げ。
近年、フランス語圏の現代戯曲翻訳、上演に意欲的。

『ボノボたち～LES BONOBOS～』公演ポスター

